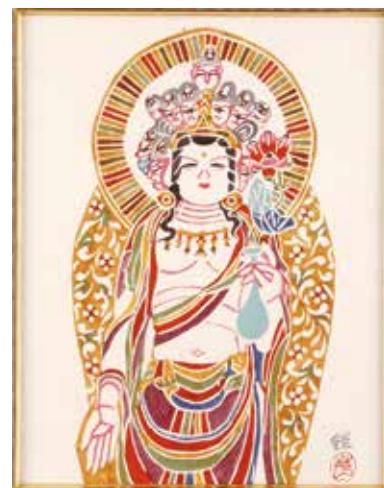




A. 不動明王



B. 釈迦三尊



C. 十一面観音



D. 薬師如来



E. 地藏菩薩

口絵 芹沢銈介作「型絵染彩色仏画」5枚組
1979～1980年 柏市所蔵

(研究資料紹介)

芹沢銈介作「型絵染彩色仏画」5枚組

門脇 佳代子

Five Pictures of Buddha, stenciled by Serizawa Keisuke

KADOWAKI Kayoko

キーワード：芹沢銈介 不動明王 釈迦三尊 十一面観音 薬師如来 地藏菩薩

要旨

染色家・芹沢銈介の「型絵染彩色仏画」（1979～1980年）は、「不動明王」「釈迦三尊」「十一面観音」「薬師如来」「地藏菩薩」からなる5枚組のシリーズで、これらは実在する仏像や仏画に着想を得て制作された。本稿では、柏市所蔵の「型絵染彩色仏画」を取り上げて、その図柄と表現技法の特徴を紹介すると共に、典拠となった仏像・仏画が京都・東寺講堂「不動明王坐像」、奈良・法隆寺金堂「釈迦三尊像」、滋賀・向源寺「十一面観音立像」、京都・神護寺「薬師如来立像」という国宝の仏像彫刻4件、および芹沢自身のコレクションである室町時代の仏画「地藏菩薩図」（静岡市立芹沢銈介美術館所蔵）であることを明らかにする。また関連資料として、東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館が所蔵する型紙14枚と、「地藏菩薩」のヴァリエーションの一つとして染められた試作染め（芹沢恵子氏所蔵）を紹介する。

Abstract

Five Pictures of Buddha, produced by Serizawa Keisuke in 1979-1980, are a series of stencil-dyed works consisting of *Fudo*, *Syaka Sanzon*, *Jyuichimen Kannon*, *Yakushi* and *Jizou*. They were based on existing Buddhist images: *Fudo* of Toji Temple, *Syaka Sanzon* of Horyuji Temple, *Jyuichimen Kannon* of Kogenji Temple, *Yakushi* of Jingoji Temple, and *Jizou*, collected by Serizawa and now in the Serizawa Keisuke Art Museum. Related materials held by the Tohoku Fukushi University Serizawa Keisuke Art and Craft Museum include 14 stencil patterns and one experimentally dyed cloth.

はじめに

芹沢銈介（1895年生～1984年没）の型絵染による最後の作品は、87歳で手掛けた「釈迦十大弟子尊像」（1982年）であった。本作は、宗教団体・愛宕一心教会がインドのクシナガラに建立予定の釈迦本堂に奉納することを目的に発願したもので、芹沢への制作依頼は出版社・天心社刊行会の代表取締役を務める新田浩氏によって行われた¹。ところで、これに先立つ1979年5月～翌年10月にかけて、芹沢銈介作「型絵染彩色仏画」5枚組が天新社刊行会から頒布されている。5枚の内容は「不動明王」「釈迦三尊」「十一面観音」「薬師如来」「地藏菩薩」で、これらは実在する仏像や仏画に着想を得て、芹沢が型絵染で制作したものである。

芹沢は「釈迦十大弟子尊像」の他にも、「法然上人御影」

（1938年）、「法然上人絵伝」（1941年）、「微笑観音」（1947年）、「極楽から来た挿絵集」（1961年）、「散華」（1967年 他）、知恩院大殿の「莊嚴飾布」（1974年）、「妙好人因幡の源左」（1979年）といった、仏教主題を扱った作品を残しているが、高僧像や物語絵（伝記絵）などが中心で、仏自体を主題とするものは多くない。本稿では、創作の典拠となった仏像・仏画と対照しつつ、図柄や表現技法の中に芹沢の創意を探っていく。また、制作の際に用いられた型紙（東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館所蔵）の中に、本シリーズのヴァリエーションが確認されたことから、それらを関連資料として紹介する。

1. 「型絵染彩色仏画」5枚組

現在、柏市所蔵の「型絵染彩色仏画」5枚組（以下、仏画シリーズと呼ぶ）（口絵）は、砂川七郎氏の旧蔵品である。砂川氏は芹沢芸術に魅了され、1981年、私邸内に「砂川美術工芸館」を設立（2007年閉館）、自身のコレクションを広く一般に公開されたことで知られている。一括して柏市所蔵となっている旧砂川コレクションの中には、芹沢の代表作や希少性の高い作品も含まれている。仏画シリーズは5点揃いで額装されており、作品の状態も良好である。

仏画シリーズの販売が開始された1979年当時、雑誌『民芸手帖』に掲載された天心社刊行会の広告には、次のように記述されている。

今回、世界的な作家として、その芸術性を高く評価されている芹沢銈介先生が構想^{（原文ママ）}なって、独自の作風である型絵染彩色仏画五題を制作下さいました。

つきましてはその中の一点宛頒布することになりました。

第一回頒布「不動明王」定価十五万円

全五題一組 七五万円

芹沢銈介オリジナル作品限定七五部

サイン入 サイズ五百×四百ミリ

帙表用紙 特漉大和チリ紙

仏画用紙 特漉雁皮楮漉合

第二回頒布は六月下旬「十一面観音」第三回以降は「薬師如来」「地藏菩薩」「釈迦三尊」の予定です。²

上記の予定とは異なり、実際には「不動明王」「釈迦三尊」「十一面観音」「薬師如来」「地藏菩薩」の順に制作され、『民芸手帖』1980年12月号掲載の広告において、第5回頒布（地藏菩薩）によりシリーズが完結したことが述べられている。

なお仏画用紙に用いられた特漉和紙には、英字「TENSINSHA KANKOKAI」の透かしが入っている。同じく天心社刊行会から売り出された縮小版の「釈迦十大弟子尊像」（1982年）には、「天心社刊行会」の6文字を透かしで入れており、いずれも特別注文の用紙であったことがわかる。

以下、頒布の順に従って、柏市所蔵本を例に図柄や表現技法を見ていくことにする。

第1回頒布「不動明王」（口絵A）

不動明王とは密教の仏で、大日如来の命を受けて忿怒の

相を表わし、仏法を脅かす魔をしりぞける役目を担う。善無畏・一行によって8世紀前半に漢訳された『大毘盧遮那成佛神變加持經（大日経）』に「慧刀と羂索を持ち、頂髪が左肩に垂れる。一目にして諦観し、威怒身にして猛炎あり。盤石上に安住し、額に水波の相がある。充滿した童子の形なり。」（漢文書き下し）と説かれ、これが不動明王の基本的な形となった。

本図では、切り出した石材を積み上げた形状の瑟瑟座の上に、火焰の光背を背負う不動明王の姿を描く。右手には剣、左手には羂索をもつ。身体は正面を向く構図だが、面部は剣を見るようにわずかに右を向いている。見開いた両眼を怒らせ、左右の牙は上から下に向かって生えている。総髪にした髪を右から左に向かって流し、左耳前で束ねて垂らしており、頭頂には蓮華を載せる。右足を上にして結跏趺坐する吉祥坐である。下半身には裳をまとい、裸形の上半身には条帛の他、胸飾・臂釧・腕釧を身に着けている。身色は鮮やかな緑青色で、光背の朱色や装身具類の黄色との強い対比をみせる。

画面右下には、鉛筆書きによるサイン「Keisuke Serizawa」と、二重六角銈印（図1-A）の落款がある。

第2回頒布「釈迦三尊」（口絵B）

釈迦如来は仏教の創始者であるゴータマ・シッダルタを指し、仏教において最も基本となる仏である。古代インドでは1世紀頃に礼拝像としての仏像制作がはじまったと考えられており、日本には、中国・朝鮮半島を経由して6世紀中頃に仏教および仏像がもたらされた。釈迦如来の図像は立像、坐像、倚像などさまざまで、また印相（手の構え）に関しても施無畏・与願印の他、說法印、禪定印、触地印（降魔印）などヴァリエーションが多い。

芹沢の仏画では、中央に結跏趺座する釈迦如来と、その両脇に侍する2菩薩を表わす。中尊は正面を向いて、右手を施無畏印、左手を与願印に結ぶ。大衣は両肩を覆い、襟合わせは広く開いて、左肩から右脇に向かって斜めに僧祇支の縁線を表わしている。また腹前で大衣の下から覗くのは、裙のくくり紐の結び目である。大衣の裾は台座の前面に長く垂下し、左右対称になるよう衣文を装飾的に整えている。脇侍はそれぞれが蓮華座の上に立っており、頭上の宝冠、持物の宝珠、張り出した鰭状の天衣、宝珠形の頭光など、左右の菩薩像で同形をとる。三尊を覆う大光背（一光三尊形式）は、中尊の頭部を中心に唐草などの文様を同心円状に巡らし、最も外側の外区には火焰を表わす抽象的な渦文と蓮華に乗った5体の化仏が確認できる。

彩色においては、図柄全体を朱一色で染めあげ、その上から摺箔の技法によって金箔を押している。あえて部分的に金箔を剥落させることで、朱と金の質感の違いをより際立たせている。同様の技法を用いた芹沢作品に、板絵「仏手」³がある。

仏画シリーズの5枚の中で唯一自筆のサインがなく、画面右下に四角銚印（図1-B）の落款のみを捺している。

第3回頒布「十一面観音」（口絵C）

観音菩薩は現世利益の性格が強く広く信仰されているが、衆生救済のための功德を多面多臂など特異な姿で表わしたものを变化観音という。十一面観音は变化観音の中で最も早く成立したと考えられており、頭上に11ないし10の面を表わす。頭上面が10の場合は、本面と合わせて11面とする。頭上の変化面は、正面の2（または3）面が慈悲相、左側の3面が瞋怒相、右側の3面が牙上出相、後頭部の一面が暴悪大笑相で、これらは本面と同じ菩薩の形をとる。髻頂に一際高く突出する1面は仏相とするのが一般的である。十一面観音は中国では6世紀後半から信仰され始め、日本には雑密とともに伝来し、7世紀後半から作例が知られている。

芹沢の「十一面観音」は、シリーズ中において最も装飾的で、鮮やかな色彩を用いている。立像だが上半身を中心に描いており、やや下ぶくれのふくよかな面貌は、アイラインを引いて紅を差したような艶めかしさを見せる。また肉身部の輪郭をはじめ、胸や腹の膨らみや首元の三道の色差しに桃色を用いており、生身の温かみを感じさせる。右手は掌を正面に向けて垂下し、左手には一輪の蓮華を差した水瓶を持っている。

頭部には、額の左右にそれぞれ3面ずつ、中央の髻上部に1面、本面の左右にそれぞれ横顔の脇面が描かれている。なお、右脇面の背後には、歯をむき出しにした横顔が覗いており、本来は後頭部にあるべき暴悪大正面を描いたと思われる。以上、正面の本面を入れて11面となり、いずれも一般的な十一面観音の頭上面に比べるとかなり大ぶりに表わされている。

装身具としては、丸い大きな耳飾（耳瑠）と胸飾をつけている。下半身に巻いた裳や、上半身にまとう天衣・条帛は、朱・紫・黄土・緑・紺の5色を用いて衣褶を塗り分けており、まるで虹の衣をまとうようである。また、本体のみならず光背にも多色を用いる。頭光部分は放射状に朱・紫・黄土・緑の4色を規則的に配置し、唐草文様をあしらった身光部分では黄土色の地に朱と緑でアクセントの色差しを行って

いる。

画面右下に、サイン「銚」を鉛筆書きし、そのすぐ下に楕円芹印（図1-C）の落款が捺されている。

第4回頒布「薬師如来」（口絵D）

薬師如来は、玄奘訳『薬師瑠璃光如来本願功德経』によれば、病氣や患いを取り除き、飢える者には食事を、貧しい者には衣服を与えるなどと説かれる。右手を施無畏印とし、左手に薬壺を持つ姿が一般的であるが、8世紀頃までの古い作例では薬壺を持たず左手を与願印とするものが多い。

芹沢の仏画では、蓮華座上に立ち、頭光をつけた薬師如来の全身像を描く。左手には薬壺を持つ。面部・肉身ともに肉付きがよく、特に衣の襷によって強調された両腿の隆起は重量感を感じさせる。高く盛り上がった肉髻、太い眉と大ぶりの目鼻立ち、顎をくくる弧線など、個性的な風貌である。

薬師如来の色差しには、茶と金泥の2色を用いている。芹沢の型絵染作品において、同様に金泥を使用した例に「色入り子菱摺箔着物」（1970年 シルク博物館所蔵）と「斜格子金彩着物」（1970年）がある。「色入り子菱摺箔着物」では菱模様の列の間に草花文が、「斜格子金彩着物」では斜格子の菱形部分に草花文や「花」「鳥」「風」「月」の文字が、金泥の摺り込みによって表現されている⁴。なお、薬師如来の左右余白は、仏身に用いたのと同じ茶色で柱状に塗りつぶされている。

画面の左下には、サイン「銚」を鉛筆書きし、そのすぐ下に二重六角印（図1-D）の落款を捺している。

第5回頒布「地藏菩薩」（口絵E）

地藏菩薩は、釈迦の入滅後、次に弥勒仏が現われるまでの無仏の世にあって、六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天）の輪廻に苦しむ衆生を教化し、救済に当たると説かれる。

その姿は、剃髪して袈裟をまとった声聞形であることを特徴とし、持物の宝珠は大地の腹蔵する豊かな福德を象徴する。また錫杖は、元来僧侶が行脚乞食の際に用いたもので、六道を巡り衆生を救うという地藏菩薩の本願を強調している。錫杖をもつ地藏像は、末法思想の高まりを背景に、墮地獄の畏れが強まった平安後期以降、盛んに造られるようになった。

仏画シリーズの「地藏菩薩」は、左斜めを向き、やや前傾する姿勢をとる。先の「十一面観音」同様、足下は描かれていない。右手には錫杖を執り、左手には宝珠を乗せる。

円頂の頭部は淡く緑がかった薄鈍色ですがすがしく、黄土色の頭光が静かな慈悲の表情を引き立てている。身にまとう衣や袈裟には、黄土・弁柄・紺・墨・薄墨を用い、混色やぼかしの濃淡によって多色の中に深い趣きを見せている。また、布を重ねた複雑な衣文も、型の端的な描線によって表現されている。

画面の右下には、鉛筆書きによる「銚介」のサインと、楕円芹印（図1-E）の落款を捺している。

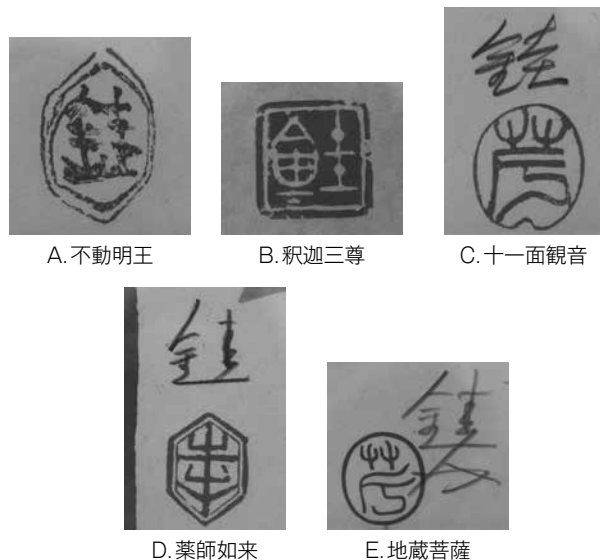


図1 芹沢銚介作「型絵染彩色仏画」落款部分 柏市所蔵

2. 典拠となった仏像・仏画について

芹沢の仏画シリーズの各画題（モチーフ）には、以下の通り、明らかな図様の共通性から典拠と考えられる仏像・仏画が存在する。

- ①不動明王：「木造不動明王坐像」京都・東寺講堂
- ②釈迦三尊：「金銅釈迦三尊像」奈良・法隆寺金堂
- ③十一面観音：「木造十一面観音菩薩立像」滋賀・向源寺
- ④薬師如来：「木造薬師如来立像」京都・神護寺
- ⑤地藏菩薩：「地藏菩薩図」静岡市立芹沢銚介美術館所蔵

①「木造不動明王坐像」京都・東寺講堂

像高173.3cm 木造 彩色 平安時代 国宝⁵

東寺（京都府京都市南区九条町）の講堂に祀られる21体の仏像は、尊像の種類や配置によって羯磨曼荼羅（立体曼荼羅）を構成しており、空海の構想による真言密教の教理を表現している。大日如来の化身であり、その教令輪身（難度の衆生に対して忿怒の姿で現れる）である不動明王は、堂内の西側（向かって左）に五大明王の中尊として安置されている。承和6年（839）に開眼した当初像は21体の内

16体で、不動明王像もその一つである。

本像は、等身をはるかに超える大きさをヒノキの一木造で彫り出し、国家鎮護の仏に相応しい重厚な威圧感がみまわっている。右手に剣、左手に絹索を執り、面部をわずかに右に向け、両眼を見開いて上歯牙で下唇を噛む。左に流した頭髮は、弁髪にして左肩に垂らしている。この像容は、天長年間（824～834）、空海が唐から請来した原本を元に制作された「紫綾金銀泥両界曼荼羅図（通称、高雄曼荼羅）」の胎藏曼荼羅五大院に描かれた不動明王像とほぼ共通しており、後にいう大師様の原型を示すものである。

ただし、本像と芹沢の仏画シリーズ「不動明王」との間には相違点も認められる。例えば、頭上に蓮華を置くことや（東寺講堂像では亡失）、弁髪の結い方、臂釧の形状、胸飾の追加などである。大師様の作例には、京都・東寺御影堂の「木造不動明王坐像」（頭頂部に蓮華、臂釧・腕釧をつける）や、京都・醍醐寺三寶院の快慶作「木造不動明王坐像」（頭頂部に蓮華、胸飾・臂釧・腕釧をつける）などがあり、別に典拠を求めた、あるいは複数の不動明王像を参照した可能性も考えられる。なお、火焰光背は東寺講堂の「木造不動明王坐像」にも認められるが、芹沢の仏画では炎の先端が画面右方向に向かって揺らめいている。こうした表現はより絵画的であり、図像典拠の中に仏画を想定することもできるが、現在のところ、細部の全てを満たす先行作品は確認できていない。

②「金銅釈迦三尊像」奈良・法隆寺金堂

像高86.4cm（中尊） 90.7cm（左脇侍） 92.4cm（右脇侍）

銅造 鍍金 飛鳥時代 推古天皇31年（623） 国宝

法隆寺（奈良県生駒郡斑鳩町）の金堂中ノ間に安置される釈迦三尊像は、大光背の裏面に刻まれた銘文によれば、聖徳太子と后が病に伏した際、王后・王子と諸臣が太子等身の釈迦如来の造像を発願し、病氣平癒と死後の往生を祈ったが、后と太子は相次いで亡くなり、翌年の推古天皇31年（623）に像が完成、その作者は司馬鞍首止利仏師であったことが知られる。日本で制作された最も初期の仏像であり、飛鳥仏を代表する。

銅を鑄造し表面を金メッキした金銅仏で、釈迦如来と両脇侍とを大光背が覆う一光三尊の形式をとる。台座は木造の宣字座で、これも当初のものが残る。前から見た姿の美しさや安定感を重視する正面観照性と左右相称性に則り、起伏に乏しい肉体表現や、幾何学的に整理された衣文線などを特徴とする。面長の顔に見開いた杏仁形の眼と仰月形の唇を配置し、いわゆる古拙の微笑みと称される、神秘的

な表情をつくり出している。また、中尊の着衣形式は中国式の通肩で表わされており、さらにその衣の裾が台座を覆う裳懸座になっている。開いた胸元には、僧祇支と裙の結び目を覗かせている。こうした止利仏師による仏像様式の源流は、中国北魏時代後期の仏像に求められるものである。

なお、中尊の手の構えに関しては、右手は全指を伸ばした施無畏印、左手は人差し指と中指のみを伸ばした刀印を結ぶが、この形は飛鳥時代の作例に遺品が多い。ちなみに、芹沢の仏画「釈迦三尊」では、中尊は両手共に5指を伸ばした形で、施無畏印と与願印を示している。

③「木造十一面観音菩薩立像」滋賀・向源寺

像高177.3cm 木造 彩色 平安時代 国宝

本像は、湖北の古刹渡岸寺の跡と伝えられる向源寺の飛び地境内観音堂（滋賀県長浜市高月）に祀られてきた。渡岸寺は泰澄の創建、最澄の再興と伝える古寺で、本像は、元亀元年（1570）、姉川合戦の際に人々が土中に埋めて難を免れたとの伝承がある。

ヒノキ材を用いた一木造で、頭髮部には乾漆を用い毛筋を刻んでいる。元は彩色がなされていたと推測されている。切れのある彫り口を特徴とし、裳の膝下部分などに翻波式衣文がみられる。

左手に水瓶を持つ十一面観音像だが、右足をわずかに前に出し、腰をゆるやかにひねった立ち姿は優美で、肘を軽く曲げて垂下する長い右手、胸や腰の弾力ある肉付きなど、官能的ともいえる完成された美しさを有している。

本面を合わせて11の面をもつが、頭上面は一般のものに比べて大ぶりにつく。また髻頂面は、通常の仏面と異なり、五智宝冠を戴く菩薩相（宝冠阿弥陀）とすることや、両耳の後ろにも頭上面を各1面ずつ配置すること、背面の暴悪大笑面が後頭部の中央に設けられていることなどは独特である。暴悪大笑面は悪をあばいて笑い飛ばし、良心に目覚めさせるという意味をもち、向源寺の十一面観音像ほど大きく目立つ例は少ない。ちなみに、芹沢の肉筆画にも、本像の後頭部（すなわち暴悪大笑面）を描いたものがある⁶。

丸く大きな耳飾（耳璫）や臂釧の形状は滋賀・園城寺の「不動明王画像」（通称、黄不動）と共通しており、頬の引き締まった顔立ちや伸びやかな肢体、インド彫刻を彷彿させる異国的な雰囲気から、平安前期9世紀半ばの作とみられている。

なお、芹沢の仏画では像本体は向源寺の「木造十一面観音菩薩立像」をモデルとしているが、共に描いている光背に関しては、室生寺（奈良県宇陀市室生）金堂の「木造十一面観音菩薩立像」（像高195.1cm 木造 彩色 平安時代 国

宝）に付随する板絵光背と一致する。光背とは仏像の背後にあって仏身から発する光明を表現したもので、平板を用い文様を彩色で表わした板光背は、遺品が南都（奈良）やその文化圏に集中している。室生寺像の光背は後補⁷だが、唐草の文様や赤と緑の縹緗彩色もよく残る華やかなもので、芹沢はその造形的な美しさから両者を組み合わせたのであろう。

④「木造薬師如来立像」京都・神護寺

像高169.7cm 木造 素地 平安時代 国宝

神護寺（京都府京都市右京区梅ヶ畑高雄町）の薬師如来立像は、元は和気清麻呂によって延暦年間（782～806）に創建された神願寺の本尊であったと考えられており、後に天長元年（824）、神願寺は和気氏の氏寺である高雄山寺と合併して神護寺と改称した。

本像はカヤを用いた内刳のない一木造で、等身大の立像につくる。表面には彩色を施さず、鋭いノミ痕の美しさを見せている。がっちりとした両肩から胸、腹にかけての厚みや、股間に表わされたU字の衣文によって極端に強調された大腿部など、自然な人体のバランスを無視し、圧倒的な重量感をみせる。

高く盛り上がった肉髻には、ごつごつと大粒の螺髪が植え付けられている。三道を刻む太い首に支えられた面部には、目尻の切れ上がった鋭い眼、口角を下げて唇を突き出した口元によって、厳しい表情が深く刻まれている。見るものに畏怖の念を抱かせるほどの異相は、呪術的であるともいわれており、神願寺は、和気清麻呂が道鏡事件⁸において八幡神より受けた託宣によって建立された寺院であることから、道鏡一派の呪詛に対抗するための神威が仏像に込められたと見る向きもある。

⑤「地藏菩薩図」静岡市立芹沢銈介美術館所蔵（図2）

縦93.3×横30.8cm 絹本着色 室町時代

芹沢が生前に蒐集した中の一点で、柔和な面相が印象的な、地藏菩薩図の佳品である⁹。仏画シリーズの「地藏菩薩」同様に、錫杖と宝珠を持ち、斜め向きにやや前傾の姿勢をとる。背景は描かれていない。複数個所に小さな補絹（補筆）が認められるが、当初部分の描写は達者で、衣の文様（団花文・唐草文）と錫杖の先端には金泥を使用している。衣の表現にやや形式化が見てとれることから、室町時代の作と考えられる。

仏画シリーズの「地藏菩薩」における変更点としては、錫杖を握る右手の位置、環状の耳飾りの追加、衣の着け方や文様が挙げられる。また、本図では衣に加えて頭光にも

淡い紺色を用いるなど、全体に寒色のイメージが強いのに対し、芹沢の作では弁柄や黄土が多用され、温かく親しみやすさが増している。

なお、芹沢の描く「地蔵菩薩」は足元を描いていないが、本図では踏み割り蓮華の上に立ち、半歩を踏み出している。こうした動勢は、来迎の場面によく見られるもので、地藏来迎図の一例といえよう。浄土教の基礎を築いた恵心僧都源信は、寛和9年（985）に撰述した『往生要集』の中で、地獄の救済者としての地藏菩薩について説いている。末法とは、仏の教えのみが存在し、悟りに至るものがない時期のことで、末法の世の到来に怯える人々にとって、地獄への恐怖は切実なものであった。来迎とは、臨終間際の往生者を極楽浄土に迎えるため、仏が往生者の目の前に現われることをいい、極楽世界の教主である阿弥陀如来が一般的だが、地獄からの救済者である地藏菩薩もまた、来迎図にしばしば登場する。



図2 「地蔵菩薩図」室町時代
静岡市立芹沢鉦介美術館所蔵

3. 関連資料——型紙・試作染め

型絵染の技法は、文様を彫った型紙を用いて布や紙に防染糊を置き、刷毛で引染め、あるいは染液にて浸染した後に、水洗いして糊を落とし、文様を染め出すもので、伝統的な型染ではそれぞれの作業が専門化されていたのに対し、芹沢はデザインから染めに至るまでを一貫して自ら手掛けた。創作の工程の中で、特に型彫りは芹沢芸術の骨格に位置する。現在、東北福祉大学芹沢鉦介美術工芸館には、芹沢が彫った約

10,000枚の型紙が収蔵されているが、終戦の1945年から亡くなる前年の1983年までの39年間に彫られたものである。その内、仏画シリーズ関連の型紙は、全部で14枚が確認された。この内の5枚は頒布用に使用された完成版で、その他は試作用とみられる別ヴァージョンである。14枚の内訳は不動明王2種、釈迦三尊3種、十一面観音1種、薬師如来1種、地藏菩薩7種。以下に、複数ヴァージョンを有する不動明王（図3）・釈迦三尊（図4）・地藏菩薩（図5）、および試作用の型紙を用いた試作染め（図6）を取り上げて紹介する。

まずは不動明王だが、頒布用（図3-1）と試作用（図3-2）とで図柄が大きく異なる。この試作用の典拠は、奈良国立博物館所蔵の『胎蔵図像』（重要文化財）所収の「不動明王図」であろう。『胎蔵図像』奈良国立博物館本は、建久5年（1194）の奥書をもつ第三転写本で、原本は円珍が唐より請来した「胎蔵諸尊様一巻」に相当すると考えられている。（図3-2）にも見られるように、頭頂に6枚の花弁からなる花を載せ、豊かな上半身と引き締まった腰つきなどにインドや西域の趣きを留める。胎蔵曼荼羅におけるより古い形像の図像的特色を伝えるものとして、よく知られる図巻である。

また、釈迦三尊の試作用型紙においては、頒布用（図4-1）と同様に法隆寺金堂の「金銅釈迦三尊像」を典拠とするもの（図4-2）と、逆台形の大光背の前に脇侍を従えた釈迦如来が立つ図柄のもの（図4-3）がある。（図4-3）に関して、典拠となる仏像・仏画は特定できなかったが、正面観の強い衣文表現や、施無畏・与願の大きな手、左右脇侍の宝珠をもつ姿勢など、止利様式の源流である朝鮮三国時代や北魏後期の小金銅仏などに散見される特徴である。なお、理由は不明だが、仏画シリーズには採用されていない（図4-2）の型紙は痛みが激しく、剥落も見られる。この型紙による作品は現在のところ確認できていないため、使用による損傷かは不明である。

型紙の中で突出して点数が多いのが、地藏菩薩の7枚である。持物や構図をはじめ、静岡市立芹沢鉦介美術館所蔵の「地蔵菩薩図」（図2）を下敷きとしたことは明らかで、異同の認められる表情や袈裟の衣文、雲の有無などに芹沢の試行が窺われる（図5-1～7）。ところで、一般に流通することのない試作は後世に残りにくいが、芹沢恵子氏所蔵「試作染め 地藏菩薩」（図6）は、試作用型紙（図5-2）を実際に用いて、図柄や色差しの検討をしたことがわかる貴重な一点である。画面下方の余白には、「アイ／ボカシ／ペロ」「洋紅／ベンガラ」など、芹沢自身の手によって記された色差しの指示書きが確認できる。



3-1 頒布用



3-2 試作用



5-1 頒布用

図3 「型紙 不動明王」東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館所蔵



4-1 頒布用



5-2 試作用



5-3 試作用



4-2 試作用



4-3 試作用



5-4 試作用



5-5 試作用

図4 「型紙 釈迦三尊」東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館所蔵



5-6 試作用



5-7 試作用

図5 「型紙 地藏菩薩」東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館所蔵



図6 「試作染め 地蔵菩薩」 芹沢恵子氏所蔵

おわりに

芹沢は自らの収集品について、制作のための資料として集めたものではないと述べているが、仏画類においては、時に創作活動との関連を見て取れるものがある。かつて筆者は、芹沢による習作の不動明王画についてコレクションの「摺仏不動明王」（静岡市立芹沢銈介美術館所蔵）をもとに制作されたことを指摘したが¹⁰、仏画シリーズの「地蔵菩薩」も自らのコレクションを取りあげた一点であった。現存する型紙から推測するに、「地蔵菩薩」は、シリーズ中、最も検討を加えたものと考えられ、また落ち着いた色使いなどに芹沢らしさがよく表れている。

地蔵像と芹沢との関わりでいうならば、芹沢は過去に一度、地蔵像の制作を断ったことがある。それは、島根県出雲で起こった大水害（1964年）の山崩れで亡くなった人々の供養として出雲民藝協会が六地蔵を建立した際のことで、その地蔵法要の寄付金を募るため芹沢へ地蔵菩薩像の依頼をした多々納弘光氏に向けて、「君の依頼はわかったが、残念ながらまだ仏様は彫れない。申し訳ないが、協会の要請には応えられない」との断りの便りを送ったという出来事である¹¹。出雲での経緯もまた、後に仏画シリーズの中で「地蔵菩薩」を取り上げるようになる機縁の一つだったのではないだろうか。

ところで、通常礼拝を旨とする仏画において一具で制作をする場合、尊像の組み合わせには経典や儀軌に基づく統一が図られる。しかし、芹沢の仏画シリーズにおける5枚（五尊）の組み合わせは、仏教的な根拠を有していない。そこで、どのように5枚それぞれのテーマが決められたのかを考えた時、関連を想起させるのが、写真家・土門拳の作品集である。仏像を被写体とした土門の写真集には『室生寺』（美術出版社 1954年）、『古寺巡礼』全5集（美術出

版社 1963～1975年）、『大師のみてら 東寺』（美術出版社 1965年[非売品]）などが知られるが、彼がライフワークとして取り組んだ仏像写真のはじまりは、1950年5月、京都の広隆寺と奈良の中宮寺でのことで、その時に撮影助手を務めたのは芹沢銈介の長男・長介であった¹²。土門の下で、考古学の資料撮影のための写真技術を学んでいた長介を、土門は「ぼくの最初の弟子」と呼んでいる。仏画シリーズとの関連で見ると、土門の『古寺巡礼』には法隆寺釈迦三尊像（第1集 第14図）、神護寺薬師如来立像（第2集 第56図）、向源寺（渡岸寺観音堂）十一面観音菩薩立像（第2集 第86図）が収録されている。「あとがき」で、土門が「最初にぼくの心をとらえたのは、弘仁時代の一木造の仏像だった」¹³と述べているが、芹沢の仏画シリーズでも、土門が好んだ平安初期の像を多く採用しており、偶然とは思えない。また、シリーズ5枚の内4枚（不動明王・釈迦三尊・十一面観音・薬師如来）は、仏像彫刻という立体造形を典拠としながら、奥行きを排した二次元的描写をしていることも興味深い。その理由には、型を用いる技法的な制約や、染色家としての意識的な図案化が挙げられるが、もう一つの可能性として写真資料の活用が考えられよう。先行する仏像・仏画の名品を換骨奪胎した明るく親しみやすい仏画は、礼拝画というよりも鑑賞画としての色彩が濃く、芹沢が本シリーズにおいて宗教的な意味よりも造形に対する関心を優先したことが想像される。

付記

芹沢銈介作品の掲載にあたり芹沢恵子様の格別のご配慮と使用許可をいただき、ここに深く感謝申し上げます。また調査へのご高配を賜りました柏市教育員会に深く感謝申し上げます。英文要旨については東北福祉大学のKen Schmidt准教授にご協力をいただきました。感謝申し上げます。

註

- 1 拙稿「芹沢銈介「釈迦十大弟子」一型絵染への挑戦」『東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館年報6』2015年 p.45 pp.63～72
- 2 「芹沢銈介『型絵染仏画』新作五題頒布のお知らせ」『民芸手帖』1979年6月号 p.46
- 3 『芹沢銈介全集 第24巻』中央公論社 1982年 pp.114～115 5点の板絵「仏手」が紹介されている。制作年代は、仏画シリーズと同じ1979年とある。
- 4 東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館には、「色入り子菱摺箔着物」と「斜格子金彩着物」の型紙が保管されており、摺り込みの際の金泥の痕跡が確認できることを濱田淑子氏よりご教示いただいた。なお、同館所蔵の「型紙 薬師如来」に金泥

の付着は確認できなかった。

- 5 東寺講堂「木造不動明王坐像」・法隆寺金堂「金銅釈迦三尊像」・向源寺「木造十一面観音菩薩立像」・神護寺「木造薬師如来立像」の基本情報（像高・材質・制作年）に関しては以下を引用した。文化庁監修『国宝・重要文化財大全3・4 彫刻（上巻・下巻）』毎日新聞社 1998・1999年
- 6 『芹沢銈介全集 第30巻』中央公論社 1982年 p.133
作品名は「脇侍仏」で1981年の制作とある。
- 7 『大和古寺大観 第六巻 室生寺』（岩波書店 1976年）所収の水野敬三郎氏による解説によれば、寺蔵文書『天保九戌年普請仕様帳』に「金式分 十一面尊軀損之処、拵御持物之不足分足し、尊像古色ニ仕上ケ、舟後光破損ニ付仕替并箱厨子塗代共ニ而」とあり、この年に京都仏師山本茂祐による修理が施されたことが記されているという。このことから、現在の光背は、天保9年(1838)に新造されたと推測されている。
- 8 宇佐八幡宮神託事件ともいう。神護景雲3年（769）、宇佐八幡宮より道鏡を天皇とすれば天下泰平になるとの託宣が称徳天皇もたらされるも、和氣清麻呂が勅使として参向しこの神託が虚偽であることを上申した。称徳天皇の没後、道鏡は失脚し、下野国で没した。
- 9 芹沢の蒐集した仏画の多くは、静岡市立芹沢銈介美術館に所蔵されており、図録『芹沢銈介の収集6 仏画・仏像・神像』（静岡市立芹沢銈介美術館 2018年）で紹介されている。本稿で取り上げた「地藏菩薩図」はp.11にカラーで図版掲載あり。
- 10 門脇佳代子「芹沢銈介と仏画コレクション」『芹沢銈介の収集6 仏画・仏像・神像』静岡市立芹沢銈介美術館 2018年 pp.54～55
- 11 奈良綾「「出雲四曲屏風」：芹沢銈介作品を旅する」『東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館年報』5号 2014年 p.84
- 12 芹沢長介は、昭和13年3月に東京都私立正則中学校を卒業後、昭和16年3月に東京写真専門学校を中退、同年4月より土門拳写真研究所に勤務し、土門拳に師事した。同研究所を退職したのは昭和21年3月である。以上、芹沢長介先生追悼論文集刊行会『芹沢長介先生追悼 考古・民族・歴史学論叢』（六一書房 2008年）所収の「芹沢長介先生 年譜」より引用。
- 13 土門拳『古寺巡礼』第1集 美術出版社 1963年〔国際版1983年〕 p.212。なお、弘仁とは810～824年間のことで、文化史において平安初期を指す。